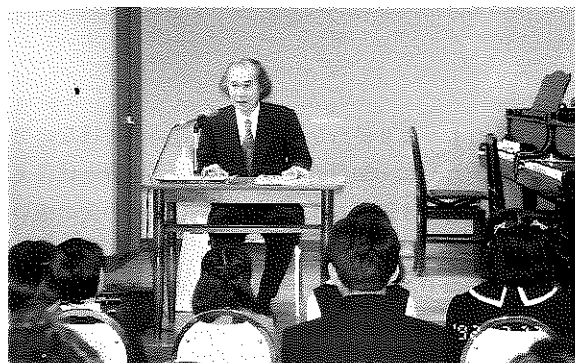


作曲家に学ぶ

[寺原 伸夫] ②

1992.3.27(金) 10:00AM~1:00PM

<東音>ホール



日本の音楽を大切に日本人の魂を歌い上げるような音楽を

私の恩師でもありますアラム・ハチャトゥリヤンの「剣の舞」という曲を皆さん知っていますか。この曲はバレエの中で剣を振り回しながら弾く、非常に民族主義豊かな曲です。この曲はちょうど、第2次大戦中につくられ、そして世界中に広まって、戦後は「剣の舞」を知らない人がいない位になりました。おそらく小さい人は小学校、中学校の鑑賞教育で聞いたかと思います。彼は、1963年に日本にできたばかりの読売オーケストラの指揮者として呼ばれました。もう日本中大騒ぎになり、その時本当に幸いなことにハチャトゥリヤン歓迎レセプションで私の曲が演奏されました。「日本の夜明け」という合唱曲だったのですが、彼がその曲を気に入って、モスクワ音楽院に留学しなさいと勧められたわけです。そして、音楽はどうやって勉強したのかと聞かれました。私は戦争中に育ちましたので音楽を勉強することができませんでした。ピアノを弾き始めたのが戦後19歳になってからです。本当に遅く始めたのですが、音楽が好きで好きでしょうがなく、作曲家になったのです。どうやって作曲の勉強したのかと聞かれて、独学です、と答えました。今何をしているのかと聞かれ、落合第2中学校の音楽の教師をしているということを言ったら、今の曲がとても気に入ったので、モスクワに留学しなさいといきなり言われました。その夢が1年後に現実になって、7年間留学しました。そのことが私の書いた「剣の舞 ハチャトゥリヤン」という本に書かれています。

アラム・ハチャトゥリヤンも遅くから勉強しました。なぜならトルコの近くのアルメニアという小さな国、大地震があったりして今ゴタゴタしていますが、非常に芸術を大切にしている国なのです。それでも、ハチャトゥリヤンが生まれた頃はまだ帝政ロシアの古い社会で、あまり音楽が勉強できませんでした。ちょうど彼が18歳位の時

にモスクワに来て、モスクワ音楽院の大ホールのコンサートを聴いた時のことです。ちょうどオーケストラがベートーヴェンの第9とラフマニノフのピアノコンチェルトを演奏していました。世の中にこんなに素晴らしいものがあるのかとびっくりしたのだそうです。そして、よし、それではそういうすばらしい芸術を創る作曲家になろうと思い、それから勉強したのです。最初、グネシグ音楽学校へ行き、それからモスクワ音楽院に入りました。そして世界に冠たる作曲家になったわけです。彼の創ったピアノコンチェルトをオボーリンという人が来て日本で演奏しました。それからヴァイオリンコンチェルトはオストラフが弾きました。またバレエが得意で「剣の舞」が入った「ガイーン」、「スパルタクス」といった素晴らしい作品を創りました。ですけれど、彼のそういった音楽は、アルメニアという今まであまり文化の光の当たらなかった国の民族音楽を大切にしながら、同時にモスクワ音楽院でモーツァルトやベートーヴェンやチャイコフスキーの音楽を勉強した力を基礎に創り上げた音楽です。そしてよくおっしゃっていたことは、「伸夫は日本人だから、日本の音楽を大切に、日本人の魂を歌い上げるような音楽を書きなさい」ということをいわれました。ですから、私はそのような音楽を書きましたし、今度アルバムを作るときに「わらべうた」を入れておきました。奄美大島の遊ばせ唄です。

その次の「風変わりな序曲」は、先程の「浦島太郎」の中の竜宮城でいよいよパーティーが始まる、その合図の音楽です。鯛やひらめの舞い踊りという歌があるように、風変わりな宴会がはじまる、その序曲として書いたものです。この曲も、やはりオーケストラのイメージがたっぷりあります。

「波のアラベスク」演奏 三善 晃作曲

三善晃さんという方は、皆さんご存じのように日本の代表的な作曲家で、この方はフランスで勉強されました。ですから、やはりフランス的で、例えばこの「波のアラ



バスク」もフランスの作曲家ドビュッシーを思わせるような、なかなか詩的な曲を書いていらっしゃる。今も第一線で活躍していらっしゃる作曲家ですから、私があるこれ言うのはおかしいのですが、波のゆらぎを感じさせるように弾いてほしい気がします。三善先生の波に託した思い、そういったものをもっと自分も感じて、波のゆらぎの変化をたっぷり表現できるようになれば、もっと良くなると思います。

音楽の心をいかにピアノを歌わせるか ——自分の世界を見つけだすこと

カバレフスキーも、ショスタコーヴィッチもハチャトゥリヤンも、子供のためのピアノアルバムを書いています。私もそのうちにそういう子供のためのアルバムをつくりたいなあと思い、それでできあがったのがこのピアノアルバム「こどもの夢と世界」なのです。そしたら全音楽譜の方でこれを本にしましょうということになり、絵を描いてもらって、その上詩を中田浩一郎さん——「音楽現代」という雑誌の社長さんで、以前は「音楽の友」の編集長でもあった中曾根松衛さんの筆名なのですが——その中田さんが私の曲を聞いて後で詩をつけて下さって、こういう絵本ができたのです。子供たちが初めてピアノに接した時に、こういう詩や絵があると、ちょっと楽しく音楽に近づけると思っています。今度6月5日に新宿のホールで広瀬美紀子さんという芸大の大学院を出た優秀なピアニストが、詩の朗読と一緒にピアノ演奏をしてくれます。私にとってうれしいのは、実はこの絵を描いたのが私の娘でありまして、最初のページの女の子は私の初孫を私の娘が描いていますので、二重に喜ばしいアルバムとなりました。

1曲目の「子もりうた」は実際に歌になっています。詩人よだ・じゅんいちさんの詩です。

4曲目の「アダージョ」は、いかにピアノを歌わせるかのよい勉強になると思います。それがピアニストとしてのいちばんの課題です。音楽の本質をよく掴んで、音楽の持っている中身、歌を引き出して、それをみごとに歌い上げることができる人が、偉大なピアニストになるのです。最初は先生がここのところを強くしなさい、弱くしなさいと教えてくれます。最初はそれでよいのです



が、自分でそれを感じとって、作曲家の意図を自分なりに表現できるよう力を持てるようになったら、すばらしいピアニストになれると思います。

単に速く指が動くというだけでは、なんの意味もありません。もちろんピアニストになるためには、指も速く動かなければなりません……。けれどもそれができて心が無いピアニストは全然だめです。しかも、その心は人の真似事ではだめなのです。誰かがこう弾いているからその通りに弾きましょうといった、或いは先生が言うから言う通りに、でもないのです。それは、最後は自分で選ぶことなのです。

作曲家でも、さまざまな作曲家がいるように、ハチャトゥリヤン、ショスタコーヴィッチみんなひとりひとり違うように、演奏家もひとりひとり違わなければなりません。やはり誰かの物真似ではなくて、自分の世界を創って、見つけて、私はこのように表現するのだという世界に最後は到達します。それがいちばんの課題です。

モーツァルトの再来

ショスタコーヴィッチはモスクワ音楽院の主に大学院を教えていらっしゃいました。ショスタコーヴィッチはモスクワでは神様のように思われていました。私の恩師のハチャトゥリヤンとも親しくしていましたが、とても尊敬していらっしゃいました。ショスタコーヴィッチがモスクワ音楽院を卒業する時にシンフォニーの第1番を発表しました。世界中の人々が、モーツァルトの再来だ、モーツァルトが現代に現われたと大騒ぎになりました。今度全音楽譜出版社からポケット版が出版されまして、私はその解説を頼られました。シンフォニーの1番から15番まで全部と2つのピアノコンツェルト、2つのヴァイ



作曲家に学ぶ
[寺原 伸夫]

オリンコンツェルト、2つのチェロコンツェルトの解説を書きました。そうやって全部の曲を調べてみるとショスタコーヴィッチはたいした作曲家だったと改めて思います。彼はピアノが小さい頃からずばぬけてできて、音楽的な記憶力があり、あまり練習しなくても弾いてしまうような天才でありました。オポーリンという有名なピアニストがいましたが、そのオポーリンとショスタコーヴィッチがいっしょにショパンコンクールを受け、オポーリンが1位で、ショスタコーヴィッチが2位になりました。もう2位といったら、1位と同じ位の実力ですから、ショスタコーヴィッチも迷いました。ピアニストになろうか、作曲家になろうかと随分迷いました。それで、結局作曲家になった、という人です。

演奏「ぜんまいじかけのお人形」

子供のためのアルバムより

ショスタコーヴィッチ作曲

この曲は、ぜんまいじかけで動くお人形の感じを表していますが、音楽というのは必ず波があります。そのコントラストをはっきりさせましょう。弱くするというのは難しいのです。ピアノで(弱く)弾くというのがいちばん難しい。声楽でもピアノで歌うというのがいちばん難しいのです。ですから、ピアノで歌うのではなくピアノが弾けるようになったら、たいしたものです。指や腕を上げてしまうと強くなってしまいますので、指や腕をほとんど上げないで弾くと弱い音が出ます。

作曲家や作品について深く知れば知るほど私達はその音楽から深い感動を体験できるのです

カバレフスキーもモスクワ音楽院の先生でした。作曲家の試験の時には、ハチャトゥリヤン、カバレフスキー、フレンニコフ、ショスタコーヴィッチといった作曲家の先生がズラツと並びます。作曲科は1年から5年までありますが、全員の試験を1日でやってしまいます。上級になってシンフォニーを書いた人は、2台のピアノで誰かに弾いてもらって、作品を音で先生たちに披露します。ですからカバレフスキーは、私の曲を試験の度に聴いて下さっていました。私のチェロ・コンチェルトが、モスクワで開かれた第2回国際音楽祭で演奏された時に、私の所へやってきて、とてもすばらしかったと言って下さ



いました。また、「ショパン」という雑誌からカバレフスキー先生へインタビューしてほしいと依頼されて、彼が80歳の時に自宅に行つてインタビューしました。その時、私の目の前でピアノを弾きながら話して下さいたお話が「ショパン」昭和60年8月1日通巻第19号に掲載されています。その部分を少し読んでみます。「私たちはよく、「絵はひとめ見れば解りやすいが、音楽はそれに比べるとはるかに解りにくい」という言葉を聞きますが、それは本当なのでしょう。例えば、ボルガノ、船曳き人夫(レーピン画)を見れば、船曳き人夫が川沿いに船を引っ張って歩いている所だと答えることができるでしょうが、それは外見上の主題が解つたにすぎません。画家がその絵に注いでいる深い感情と思考は、一度見たくらいではとても解るはずはありません。音楽にしても同じ事です。作曲家や作品について深く知れば知るほど、私達はその音楽から深い感動を体験できるのです。ベートーヴェンのソナタ「月光」という名前は、あなたもご承知のようにベートーヴェンがつけたものではありません。」と言いながら、カバレフスキー先生は立ち上がりピアノを弾きはじめました。この名前はウィーンのサロンの詩人のレル・シュタートという人がつけたものです。私は古いドイツの出版物で見たことがあります。月光の表紙には絵が添えてあって、月があつて湖があつてボートが浮かんでいて、そのボートには若い恋人同志がのつているという絵でした。そして月の光がこの世を照らしているといったぐあいに……。カバレフスキー先生は怒つたような口調でおっしゃいました。「これはまったくばかげた事です。この曲は悲劇的な音楽です。この頃ベートーヴェンの聴力は失われようとしていました。彼は自分の弟子のジュリエッタが自分を愛してくれ、将来自分の妻となってくれることを願っていました。」ところがジュリエ



作曲家に学ぶ
[寺原 伸夫]

ツタは、通俗的な作家でしかないカルレンベルグという人と結婚してしまいます。ベートーヴェンは自分の医者に、耳が聞こえなくなるという苦悩を愛が救ってくれるかもしれないと話していたのですが、ジュリエッタはベートーベンから離れてしまいました。「彼女は伯爵の位を持ったサロン作家カルレンベルグと結婚してしまいました。その痛手を乗り越える彼の意志はどれほど偉大でなければならなかったか。月光はこういった苦しい時期に作曲されています。本当の題名は幻想ソナタで、ベートーヴェンはその原本に「伯爵夫人ジュリエッタに捧ぐ」と書きました。だからこれは悲劇的な音楽です。例えば、第1楽章の最初の部分は葬送的な音楽のイントネーションと同じです。」と言いながらショパンの葬送行進曲など他の葬送行進曲を弾いてくれました。「もちろん葬送行進曲ではないけれども、ここには信じ難いほどの悲しみが描かれています。そういうことがよく解った人だと、このソナタを演奏するとき、全く違ったように弾くでしょう。だから、ピアニストになる人はそういった作曲家のことを知り、曲を知り、それがどのような状況で作られたかということが重要になってくるのです。或いはそういうことが解らない曲も多いのですが、音楽が本当に解ってくるとその音楽を弾いてみたり聞いてみたりすると、これはどういう意味を持っているか、どれが主題でどれを大切に弾かなければならないのかということが解ってきます。ですからピアニストになるためには、自分の耳をとぎすますと同時に沢山のこと、音楽の形式の勉

強、音楽の歴史、作曲家のいろいろなことを勉強しなければなりません。」ということのカバレフスキー先生がおっしゃっていました。私は本当にそれはすばらしいことだと思って、それを肝に命じて、日本に帰って雑誌「シヨパン」に書きました。カバレフスキーが言っている「作曲家や作品について知れば知るほど、私達はその音楽から深い感動を体験できる」ということを最後にみなさんにお伝えして終わりたいと思います。

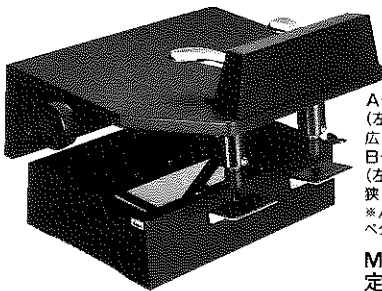


[寺原伸夫]

作曲家を志し、独学で映画「キューボラのある街」の主題曲「手のひらの歌」、日本と中国の友好を歌った歌曲「東京-北京」などを作曲。

1964年来日した「剣の舞」の作曲家アラム・ハチャトゥリヤンの勧めで、モスクワ音楽院に留学、同院に師事して1971年に同音楽院の修士課程を修了。主な作品に卒業作品のチェロ協奏曲（第2回ソビエト国際フェスティバル参加曲、モスクワで楽譜出版）、オペラ「広島」（ラトビア音楽コンクール・グランプリ、モスクワで楽譜出版）、弦楽オーケストラのための組曲「ふるさとの詩（うた）」（モスクワで楽譜出版）、最新作にピアノ・アルバム「こどもの夢と世界」（全音楽譜出版社）、著書に「剣の舞ハチャトゥリヤン」（東京音楽社）、訳書に「ハチャトゥリヤン（音楽の友社）、またショスタコーヴィッチ全15曲の交響曲（全音楽譜出版社・ボケット版）の解説を担当。アラム・ハチャトゥリヤン、カレン・ハチャトゥリヤンに師事。

現在、日本現代音楽家協会会員、日本作曲家協議会会員、日本童謡協会会員、日ソ音楽家協会常任委員。



Aタイプ
(左右ペダルの間隔が
広く三本ペダル用)
Bタイプ
(左右ペダルの間隔が
狭くGP二本ペダル用)
*A・B両タイプとも
ペダルは二本です。

M-60補助ペダル
定価 ¥32,000

ピティナで育った補助ペダル

まずはお試しください。

- 全く新しいメカニズムにより、スムーズで音切れが良いペダリングに驚かれるはずですが、
- 安定性があり、演奏中の雑音やペダルはずれも解消、また、お子様の成長に合わせて簡単に上下が可能なメカニズム…これらは、すべてスムーズで正確なペダリングを可能にしたからこそ生きてくるのです。
- 幼いうちから正しいペダリングを身につける…それも一つの財産です。

お問い合わせ・お申し込みは、ピティナ購部まで 03(3944)1581
●会員特別価格 ¥28,000(税込)



株式
会社

ピティナ ミュージック